

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

企画・制作：株式会社 新聞ビル

クロスメディアを総合力でプロデュースする

PTC GROUP

半田中央印刷株式会社

〒475-0032 愛知県半田市潮干町1番地の21
TEL 0569-29-2525(代) FAX 0569-29-4500
<http://www.handa-cp.co.jp>

元氣のでてくる「ことばたち」

232

村上信夫

撮影・中川真理子



とあって、母と二人三脚で必死に覚えた。「最初の撮影は10日間くらい山形で、真冬の1月中旬だったからとにかく寒くて(笑)。その

品だからだろう。小林さんは、去年、再放送のPRでインドネシアとスリランカに行ってきた。インドネシアには大ブームのときも含めて3回訪れているが、みんなよく覚えていて、「おしんが来た!」とすぐ集まっ

に貧しい大変な時代があり、それを乗り越えていまのように発展したと知って、生きる希望や勇気が湧いたそうです。「日本人は農耕民族なので、とくに東南アジアの方たちには共感できる部分がたくさんあったと思います。家族に対するやさしさや思いやりの気持ちはどの国の人にも通じるものですしね。」

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。現在は、全国を回り『嬉しい言葉の種まき』(毎週日曜10:00~)、月刊『清流』連載対談〜ときめきトークなどで、新たな境地を開いている。各地で『ことば磨き塾』主宰。1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『嬉しいことばの種まき』『ことばのビタミン』(近代文藝社)『ラジオが好き!』(海竜社)など。趣味、将棋(二段)。<http://murakaminobuo.com>

おしんは宝物

女優 小林 綾子さん

女優・小林綾子さんは、なんと芸歴40年。5歳で東映児童演技研修所に入り、3ヶ月目にポスターの仕事をして、そのあとすぐ「仮面ライダー」でショッカーにさらわれる役がテレビの最初の仕事だった。以来40年、小林さんは知らぬ間に不惑の年齢に達していた。

おしんが、いまの自分を作った

「おしん」に出たのは、10歳のときだ。

「あの頃はひたすらやるだけで一杯で、まさかこんなにみなさんの記憶に残る作品になるとは思っていませんでした。」

一生「おしん」のイメージがついて回るが、それをわずらわしいと思ったことは、まったくないそう。むしろ大事な宝物だという。

撮影前に、山形県の方言のテープと6週間分の台本をポンと渡されて「台詞だけはきちんと覚えてきてください」といわれた。それを全部完璧に覚えていかなかった

あと夏のシーンを撮りに奥多摩へ行つて、次はNHKのスタジオで1週間分を撮る。主役なので朝から晩まで出さずっぱりなんです。子どもなのに、いまじゃありえない撮影スケジュールでした(笑)。

「でもそういう大変なことをなるとか乗り越えられたという自信が、その後につながっていった気がします。どんなに大変な仕事でも、あのときに比べたらいいことはなにも思えてきて、自分のバネになった作品だったと思います。」

「おしん」が80以上の国々で放映されて大人気を博したのは、見た人が元氣やパワーをもらえる作

てきて、スマートフォンでいっしょに写真を撮るなど大歓迎された。

「ある意味シンデレラストーリーですから、自分たちも一生懸命がんばれば報われるという励みになったといわれ、ドラマの力つてすごいなと思いました。経済大国の日本に、少し前まではこんな



俳画/イネ・セイミ

一九九五年のNHKスペシャル「こころの王国」で、金子みすゞの役を最初に演じたのも小林さん

だ。「私は純粋に彼女の詩のすばらしさにほれこんでいて、こういう見方もあるのかといういろいろな気づきを与えてくれました。だからやっぱり、世界中で読まれるようになってうれしいと思います。そこは、おしんに対する思いと同じです。」

おしん、おはる、みすゞとともに生きてきた小林綾子さん。もちろん、この他にも、たくさんのお話を聞かせてくれた。その女たちが、小林さん自身の女としての感性を磨いてくれたのだろう。久方ぶりに会った綾子さん、ますます輝きを増してキラキラしていた。これから先、どんな役が、彼女をさらに磨いていくのだろうか、楽しみだ。

人は、磨かれる。ことばで。好評発売中

■イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。



俳画教室開講中

ところ 常滑屋
とき 俳画教室月一回(午後一時三十分~三時三十分)
会費 一回 二二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九三三〇四七〇

インディアンフルート教室開講しています。

誰でも簡単に音が出せる楽器です。あなたも今日からインディアンフルート教室開講しています。講師 イネ・セイミ (日本インディアンフルートサークル協会ディレクター) ネイティブアメリカンのスピリットが感じられるインディアンフルート。その音はやさしく心に響きます。レッスン30分4,000円 会場 半田市潮干町1番地の21 申込先 0569-89-7127 志願書 ine.seimi.jp@gmail.com

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (82) 岡田 清治

姪の就職2

裕美は真三のがん報告をじつと聞き入っている。健太郎の時と重ね合わせているのかも知れない。あるいは低血糖に陥ったことや手遅れになったことを悔やんでいるのか。真三にはわからない。

「裕美さん、がんは初期のうちに対応すれば、もはや怖くない病気です。検査を怠ると治すチャンスが逃します。行政が主要ながんの検査を低料金ですつこいぐらひ呼び掛けていますが、受診率は低いですわね」

「気にはなりますが、忙しさにかまけて行きそびれますね。それに結果が怖いという心理が働きますが、健太郎さんが、ああいう亡くなり方をしましたので、これからは一、二年に一回は受診しなければならぬと思います」

「確かに初めは勇気がいらしますが、後々のことを考えますと、必ず受けた方がいいですよ。がんで亡くなった人の多くはフェイズ3、4の段階が多いのです。なんとフェイズ1、やむを得ない場合でも2の段階で受診すべきです。これががんの恐怖から免れる方法だと私は思っています」

「そうだと思います。がんも種類が多いですが…」

「そうですね。定期検査は主要ながん検査でいいと思いますが、一応、人間ドックでがんマーカーやオプションで特殊ながん検査を受けるのも一法です。私の知り合いです。がんではありませんが、脳ドックを毎年受診する人もいます。一度、脳血栓で危険な状態を体験したこともあって、オプションで受診しています」

「やはり一度、危険な目に合わない、人はやりませんね。だから昔から一病息災といいますが、つまり病気もなく健康な人よりも、一つぐらい持病があるほうが健康に気を配り、かえって長生きするということですね」

「年をとっていきますと、健康なことがなりよりだと思ふようになってきました」

「裕美さんがそう考えるのは早過ぎると思いますが、いまは舞さんが無事にインドに行って、これから先の人生を見つめることが大事ですね」

「本当にそうですね」

「がんは検査で早期発見が大事だと言いましたが、もしがんが見つかったときにどう治療をするかというところで悩みます。そしてこの病院を選ぶかによって結果に差が出る場合があります」

「最近、雑誌の特集で良い病院と悪い病院という報告を見ることがあります。人は自分の住まいと病院の所在地を見ながら、近くに良い病院があれば願うでしょうね」

「良い病院というのはがんの術後の生存率が高い病院ということですが、ところが初期のがん患者の比率が高いと、当然生存率が高くなります。だから見極めるのは難しいですが、手術をした患者数で判断するのも一つの方法かと思えます。それとそれぞれの病院がどこまで情報を公開しているか、病院のホームページで見られることも参考になります。自信のある病院は医師の略歴等、詳しい情報を掲載しています」

「一般論でいえば国立がんセンターがいいと思うでしょう。地方の人は遠いからダメだと考えますが、入院すれば費用は交通費を除けばほぼ同額ということになります。ただ家族の人が見舞いにいくとなると大変です」

「ジで見ることも参考になります。自信のある病院は医師の略歴等、詳しい情報を掲載しています」



【写真】病氣も人生も霧と同じで、いつか晴れる(著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」「インド」「愛知県」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。FAX: 0569-34-7971 メール: takamitsu@akai-shinbunten.net



■プロフィール
著者・岡田清治(おかせいじ)
一九四二年生まれ ジャーナリスト
(編集プロダクションNET108代表)
著書に『高野山開創二百年 いったんさん行状記』『心の遺言』『あなたは社員の全能を引き出せますか!』『リヨンで見た虹』など多数

「現実にはどうしても近くの病院を選ぶことになります。健太郎さんもいろいろ考えた末に地元の県立の病院に決めました」

「私はがんの拠点病院ならいいのではないかと思っています。仮にいい病院に入れても主治医はよほどのことがないと選べません。仮に紹介されたとしても待機者が多い場合、がんが進行する心配もありますし、お礼の費用もばかになりません」

「そうですね」

「前立腺がんの場合、治療法は三つです。摘出手術か粒子線治療や放射線治療、そしてホルモン治療です。それぞれメリット、デメリットがあります。摘出手術が一番シンプルです。これはがんの病巣を取り除きますので、原理的には体から一挙にがんがなくなります。ただし骨や他の臓器に転移していれば、手術は複雑になります。骨への転移であれば抗がん剤を打ち続けることになります。この薬剤効果によつても副作用も相当なもので、患者さんによつては副作用に耐えられなくて途中でやめる人も少なくないようです」

「抗がん剤が大変のようですね」

「放射線や粒子線治療だと、がんが再発して摘出手術をしようと思つても不可能なものです。また粒子線治療はほぼ100%の完治を謳っていますが、治療費が高額で健康保険の対象ではありません。成功率が高いのは初期のがんでないし受け付けてくれないようです」

「そうですね」

「胃がんの場合など、従来はお腹を切開して病巣を摘出する方法をやっていました。ところが近年は腹腔鏡手術といつて、お腹に1cm程の穴を数カ所あけて、腹腔鏡と呼ばれる高解像度のカメラを挿入し、専用の器具を用いて手術をする方法が行われています。胆のう摘出術、胃がんの手術、大腸がんの手術などに用いられています」

「腹腔鏡手術では手術でできる傷が小さいので、術後の痛みが少なく、立ったり歩いたりするまでの回復の時間が早くなるメリットがあります。ただ、高度の医療技術が要求されますので、時々、失敗の報道がされています。とにかく検査から手術までいろいろ悩ましい判断が求められるのです。がんの種類が同じでもそれぞれの人に応じた対処法が必要ですよ。お医者さんも迷うものだからセカンドオピニオンを薦めます。他の病気ではほとんど見られなかったことです」

「お義兄様の場合、術後は順調ですか」

「三ヶ月に一度、血液検査によってPSA値の変化で骨や他の臓器への転移を調べてもらっています。診察後ホルモン注射を打つて、処方剤のカソデックスというホルモン錠剤を受け取るのをずっと続けています」

「それでいまのところ変化はないですね」

「裕美は念を押すように確認した」

「いまのところは大丈夫です。ところが人間ドックで今度は胃がんの兆候があると言われ、改めて驚きま

た。二度目のがん宣告ではかなり冷静でおられました。まったく存じ上げていなくてすみませんでした」

「いえいえ、女房にも緘口令を敷いていましたので、誰も知りません」

「それにしても大変だったんですね」

「胃がんの初期でしたから内視鏡で切除する方法をとりました。男性の担当看護師に術後、聞きますと『100%成功しますよ』という説明をしてくれたのです。ところが退院後の診察でがんを完全に切り除けていませんとショックな話をされました。この時は頭が真っ白になりました」

「それでどうされたのですか」

「私はこの担当医と全く気が合いませんでしたので、国立がんセンターの紹介状を書いてくださいと語気を強めて頼みました」

「それはいいですが、東京ですよ」と担当医は明らかに嫌な顔を見せました

「内視鏡で可能ながんの手術は100%だと聞いていましたので、取り残しがあると聞きまして信じられなくなりました。すると、担当医はがんの発症している位置が付け根のところで切除が難しいところであると、言い訳をするのです」

「それでどうされたのですか」

「残りのがん細胞の切除を内視鏡でもう一度、やることにしました。というのはこの医師は消化器内科が専門ですが、消化器外科の医師とペアーを組んで相談しながらやっていますので、自分一人の判断ではないというのです。それを聞いて若干、安堵しました」

「再び、内視鏡手術で切除を試みてもらいましたが、術後の検査でまた異なる場所に見つかったのです」

「そんなに早く広がるのですか」

「もう、がっくりしました。担当医は外科の医師と相談したところ、これから先、がんが見つかるたびに内視鏡手術をされますか、それとも全摘手術をされますかと迫ってきました」

「それは悩みますね。それでどうされたのですか」

「しかも外科の医師が女医だったことも驚きました。外科医は女医が少ないと思っていたからです。ともかく女医の面接を受けました」

「複雑な気持ちになりましたね」

「女医が言われるには、がんの発症している場所が内視鏡で取り除くのは難しいようですよ。私は腹腔鏡手術をおすすめします」

「自信顔で話される。真三はしばらく逡巡した後、「お願いいたします」と頭を下げた。その時の判断は真三の質問に真摯に答えたからだ。そして女性の方が器用ではないかと考え、「先生に命預けます」と笑って承諾した。今度、手術の指導資格をとりましますので、今回の手術の様子をビデオ撮影したいのですが、承諾していただけますか」

「……」

絵手紙 第二集



絵文 縦山善久

返文 小林玲子

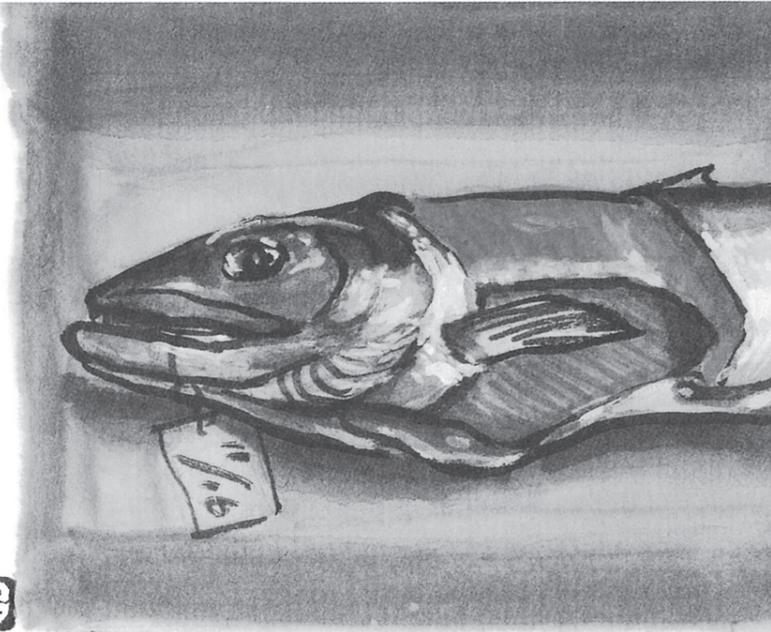
縦山善久

昭和十一年碧南市で生まれる。丸栄陶業株式会社代表取締役。碧南商工会議所会頭。愛知県陶器瓦工業組合理事長。全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。平成二十三年藍綬褒章受賞。平成二十二年旭日小授章受賞。丸栄陶業株式会社取締役会長を経て相談役に。京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科・洋画コース大学院修士課程修了。平成二十九年六月碧南市藤井達吉現代美術館にて初の作品展開催。独立美術展 入選。

小林玲子

碧南市に育つ。西尾市在住。共著「西尾の民話」童話「サケの子ピッチ」随筆「海辺のそよ風」(中経コラム「閑人帳」より)ミュージカル脚本「みぐりちゃんのおうち」童話集「タアタとバアバのたんけんたい」

描いて食べ
食べて描いて
越後鮭



越後村上の塩引鮭(全長82cm 重量4.5kg)

昨年暮れ、友人から新潟県村上の塩引鮭を頂き、その大きさに吃驚しました。伝統の塩引鮭は秋鮭を一本ブフ丁寧に加えて、十一月から十二月の日本海の寒風で干し上げたものです。同封の説明書には、直射日光や雨の掛らない軒下等の風通しの良い場所に吊して保存して下さいとありました。塩引鮭を見るとき、暮れから明治にかけての洋画家として近代洋画への橋渡しをした高橋由一の重文作品「鮭」を思い出し、年の一部を削いで絵手紙に描きました。

豆まきが済みましたが、極寒の日が近づきます。艶やかな紅色が美味しそうな塩鮭の絵手紙を拝受致し眺めておりましたら、お茶碗に山盛りのほかほかご飯が目につかびました。由一の絵より美味しそうです。身を削がれても、目玉をむいて、生きていますねえ。秋の鮭は「秋味」というそうですね、新米と相性がいいのでしょうか。いつもながらの新鮮なお便りを頂き、本当にありがとうございます。

お風邪など召しませぬよう、どうぞお揃いでご健勝にお過ごし下さいませ

敬具

